

## UR—左上象限・個人の内面・“I”

私たちは誰なのか?

- ・21世紀を生きるうえで、我々はどのような知性を備えているべきなのか。
- ・自己探求と自己理解
- ・Vision Logic とは?
- ・実存的段階としての VL
- ・心身統合の段階としての VL
- ・個的段階 (personal) と超個的段階 (transpersonal) の結節点としての VL

### <第一部 Vision Logic 段階への道程>

#### ○合理性段階から前期 VL 段階へ

- ・大学・大学院での論文執筆は、生徒が合理性段階に達していることが前提とされている。「書き方」を教えることはできるが、生徒の意識が合理性段階に到達していない場合、問題意識をもつことができない。
  - ・いかなる批判を浴びても、それにたいして防衛できてしまうという状態は、自己を内省できない状態ともいえるが、これは合理性段階の特徴的なもの。
  - ・合理性段階は自分への強い自信を持つ段階であり、それに伴い自己充足感を感じる段階である。
  - ・合理性段階が熟してくると、自己充足感が閉塞感・孤独感・孤立感を伴ってくる。
- 自己の構築・蓄積したものが自己を閉じこめる「檻」と感じられるようになる。  
→異なる感覚・価値観・思考をもった他者との対話を求めるようになる。

#### ○前期 VL 段階

- ・映画『もののけ姫』の主人公・アシタカは、多くの関係者の間を移動して、彼等の立場を共感的に理解するが、根本的な解決には至らない。
- 各関係者が置かれた文脈を共感的に理解することができるのは、前期 VL 段階のひとつの特徴といえる。

#### ○中期 VL 段階の特徴

- ・前期 VL 段階の限界を克服する段階。
- ・各関係者が置かれた文脈を理解するだけでなく、多様な関係者が共有している集合規模の文脈や構造 (システム) を俯瞰的にとらえて、それらに言及する。
- ・同時代に生きる人々は、そこで所与のものとして存在する「ゲーム」に無意識の内に参加している。中期 VL では、その「ゲーム」を意識化・対象化し、それが「ゲーム」であると見破り、醒めた目で見て生きることができるようになるといわれる。より本質的・本来的・普遍的な価値や法則にもとづいて生きようとする。
- ・人間は、非日常体験を経験することにより、「ゲーム」を対象化することがある。

#### ・今回の参考資料の映画の構造説明

『ゲーム』：資産家の男性が、地位・財産等全てを失し、そこから再生する。

『キャスト・アウェイ』：仕事熱心な男性が飛行機事故に遭遇し無人島に漂着。それまでの

日常を構成していた全てを失う。

『切腹』：ある藩の無慈悲な行為がもとで家族全員を失った武士が、その藩に対し命がけの主張を行う。

『ゼロ・グラビティ』：女性の宇宙飛行士の話。比喩的な表現が多く出てくる。“landing is launching”など。

参加者との対話より

・Q：ゲームとシステムの違いは？

A：ゲームは人々が無意識のうちに参加している営みそのものであり、システムはゲームを生み出す元になっている（時代の流れの中で次々とあたらしいゲームを創出して、その中に人々を呪縛していく）。巷にあふれているビジネス書などで書かれていることは、優秀なゲーム・プレイヤーとして振舞う方法に過ぎず、ゲームを作り出すシステム自体を問題視するための方法は示してくれない。

## <第二部 Vision Logic 段階の心理学：ロゴセラピー解説>

○フランクルの心理学

・人間は、一回だけの人生を生き、死ぬ。今、ここにおけるおのれ自身の存在＝実存。フランクルの心理学は、実存主義心理学と呼ばれる。

・フランクルは、ナチスドイツの強制収容所での体験をもとに彼の実存主義心理学を編み出したと言われることがあるが、そうではない。生きることの心理学の本を執筆していたが奪われ、それを完成させることを生きがいに収容所を生き抜いた。

・還元主義との戦い

フロイト心理学：人は「快楽への意志」により動かされるに過ぎない。（身体・Body）

アドラー心理学：人は「力への意志」により動かされるに過ぎない。（心・Mind）

フランクルは、快楽や力への意志を超えて、より高貴な在り方を志向する人間の働きに注目した（例：体調が悪くても子どもの世話をする母親、川に飛び込み子どもを助けるという行動）。

○「意味」への意志と精神の働き

・フランクルのロゴセラピー：「意味への意志」（精神の働き）

精神：「意味」を感受する器官。意味を志向し、自分自身を超えて、意味の実現へと向かう。

「意味」：人間個人の外部から来る。「良心の声」を聞き取ることで理解できる。状況の中で与えられる、はっきりしたもの。

・フロイト（快楽）とアドラー（力）の心理学を補完するもの。例：精神の働きを、快楽や力に基づくものと誤解してはいけない。この身体・心・精神という三つの階層を利用するという発想は、VL 段階的と言える。

・人生の問いのコペルニクスの転回

「私たちが人生からもはや何も期待することができなかつたとしても、人生が私たちに意味ある態度を取ることを期待している。私たちが人生の意味を問うのではなく、私たちが

人生から問われているのである。」(フランクルの言葉)

・自由と責任

人生における、その人だけの一回きりの状況に対して、人は独自の態度を取る自由がある。同時に、その状況の中で実現することを待ち望まれている義務が埋め込まれている。そうした義務を感じ取ることを、フランクルは「良心の声」を聞き取ることであると述べている。

・「過去、現在、未来」の関係

	過去	現在	未来
一般的な理解	無 →	有 →	無
フランクルの心理学での理解	実現した意味は永久に保存される(有)	←実現された意味(有)	←実現すべき意味が可能性として存在(無)

・我々の行為の影響について。

我々が固有の状況の中で実現した「意味」は、取り消すことのできない事実として、永遠にこのコスモスに保存される。

・人生において認識することのできる3つの価値

- 1 <創造価値>人間が何かを作り出すことによって、世界に何かを与えるという価値。
- 2 <体験価値>人間が出会いと体験をとおして、世界から何かを受け取るという価値。
- 3 <態度価値>どうすることもできないぎりぎりの運命に直面したとき、それに対してとる態度に対する価値。

・勝田 茅生『ロゴセラピー入門シリーズ3:精神の反抗力と運命/喪のロゴセラピー』(PP. 38-45) より

身因性のうつ病とその薬により、ひどいうつ症状・薬の中毒症状・薬のない時には自殺を考える状態を繰り返している女性のケースのセラピーの例。

「なぜ死なせてくれないのでしょうか」と言う女性に対し、「突然、活気のあるハンブルクが気に入ったからといって、ミュンヘンではなくハンブルクに住むために家を出られますか?」と問う。「そんなことはできません。私は一人で生きているわけではないのです。」と答える女性に対し、その女性が生きていることは、少なくとも女性の家族にとっては大きな意味をもっていること、彼女が自分の家族に対して責任をもっているということを気づかせる。

・パーソナルとトランスパーソナルとの隣接点

- 自己距離化.....制約からの自由
- 自己超越.....自分以外の何かへの自由

参加者との対話より

・自分以外の外部から「意味」を聞き取る際には、本人が、意識の発達段階の上の方の段階にきちんと到達していることが必要な前提条件とも言えるのではないか。

・マズローも「自己実現」と言ったが、そもそも「自己実現」という言葉は自己超越的な意

味を含んだものだった。

<感想>

- VL 段階は非常に高度な段階であるが、課題図書・映画、講師からの講義、参加者との対話の3つを通して、VL 段階の知性が徐々に具体的に浮き彫りにされてくる。課題図書と映画に目を通しておくことでより理解が深まる。
- ログセラピーを学んで、講師が「無駄に時間を過ごすことがなくなった。」と述べていたことが印象に残った。狭い「檻」のような自己の視点から外に出すしくみを持つログセラピーについて深く学んでみたいと思った。